「はっ！。」

アイシャの拳から迸る赤い熱線が
マーゴの身体を粉砕し消滅させる。

「しかしまぁ、
よくこんな路地裏を見つけるよねアイツら。
それよりも・・・。」

アイシャは
道の端で倒れている少女の元へ駆け寄る。

今日のアイシャは前日に少々ハードな
上級マーゴの討伐という任務をこなしたので、
その任務報告や諸々の用事で
リベラティオ本部を訪れていた。

報告と用事は午前中に終わらせ、
午後からは完全にオフになったので、
なんとなく町をぶらぶらと
散策していた時の事である。

（・・・？。）

それは1人の、おそらく中学生くらいの少女が、
サラリーマン風の男性と共に
細い路地に入ろうとしている所だった。

そのカップリングは
色々と不穏な香りがしなくも無いが、
ふと見かけたアイシャの目には男の方が、
別のものとして見えていた。

（あの男、マーゴだ・・。）

男性の外観は普通で
少女に話しかけてる姿はどう見ても人間だ。

だがマーゴハンターからすると
マーゴは余程高度な擬態でない限り、
その動きには違和感があるらしく、
アイシャもその違和感を感じたのだ。

少女を連れた男性が路地に入ってから
少し間を置いた所で
アイシャも路地に入り、2人の後を付ける。

（ここら辺はよく来るけど、
こんな場所があったんだぁ・・・。）

気付かれないように後を付けていくと、
どんどん人のいる気配が無くなり、
馴染んだ町の筈なのに
知らない風景ばかりになり、
ちょっと新鮮な気分になっていた
アイシャだったが、

その耳に少女の悲鳴が聞こえた。

いつものようにマーゴに踏みとどまってもらおうと一声かけようとしたのだが、

今回は言い終わらないうちにマーゴがアイシャに襲い掛かって来たため、マーゴは灰塵に帰す事となった。

「…あ、あれ？…。」

「あ、気が付いたかな？。」

アイシャは倒れている少女の元に行き
しゃがみ込む、
すると、少女は直ぐに気が付いたようだった。

「おねえさん…だれ？。」

「ん？、ちょっと通り掛かった人、
あなたが倒れてたから声を掛けたんだ。」

マーゴに襲われた人の対処は
以外とデリケートな所があり、
時には未知の怪物を見た事に
パニックを起こしたりする人もいるので、
最初は出来るだけ朗らかに
かつマーゴの話題を避けるというのが
良いとされているので
アイシャもそれに則って少女に接する。

「…ん？…？…？」

ぼんやりとしながらも
キョロキョロと周りを見回す少女、
なにやら考え込むと、

「おばけ…どこ？」

とアイシャに尋ねてくる、
どうやらマーゴをおばけと解釈したらしい。

「それなら私が追っ払っておいたから大丈夫だよ。」

「おねえさん、すごい、あんな怖そうだったのに。」

「そんな事ないよ、ふふっ。」

少女はどうやらパニック等は
起こしていないようだった。

こういった非日常な出来事は
案外子供の方が受け入れ安いという
話があるがそういう事もあるのだろうと
アイシャは安堵した。

「おねえさん…。」

「ん、何？。」

「これ、お礼…。」

と言って少女がペンダントのような物を
アイシャに差し出してきた

「？、くれるの？。」

「うん。」

「でも大事なものなんでしょ、貰えないよ。」

「え…でも…でも…。」

少女にとっては出来る限りの
お礼と思っての事なのだろうが、
アイシャとしては当然そんなつもりは無く、
出来れば近くの病院に彼女を運んで
お別れという流れにしたかったのだが。

アイシャの反応に
だんだん表情が曇り俯いていく少女
に罪悪感が芽生えてしまったので、
ここはひとまず少女の好意を受ける事にする。

「分かった、ありがとね。」

と言ってペンダントを受け取ろうと
手を差し出すアイシャに
少女は。

「つけてあげる。」

と笑顔で言ってきた。

アイシャとしては、
先程の暗い表情が笑顔になってくれたしと
この少女のする事に付き合う事にしたので。

「じゃあお願いできるかな。」

と少女の方に
頭を差し出すような姿勢をするアイシャに
少女は少したどたどしい手つきながら
ペンダントを掛ける事が出来た。

「似合うかな？。」

とペンダントを付けられ
そう尋ねるアイシャに
少女は、

「うん！。」

と満面の笑みで答える。

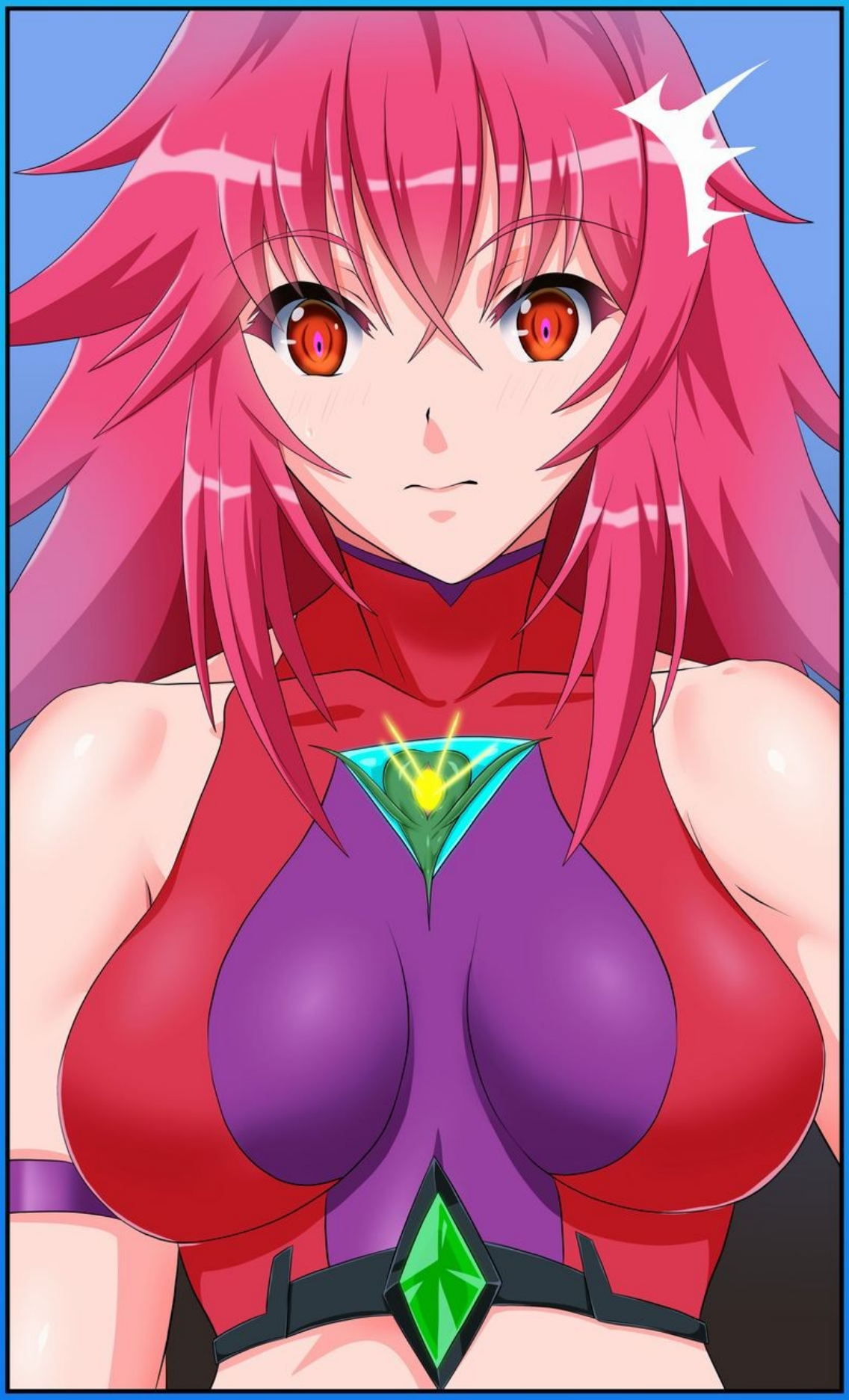
ほぼ同時のタイミングで、

ペチャ・・・・。

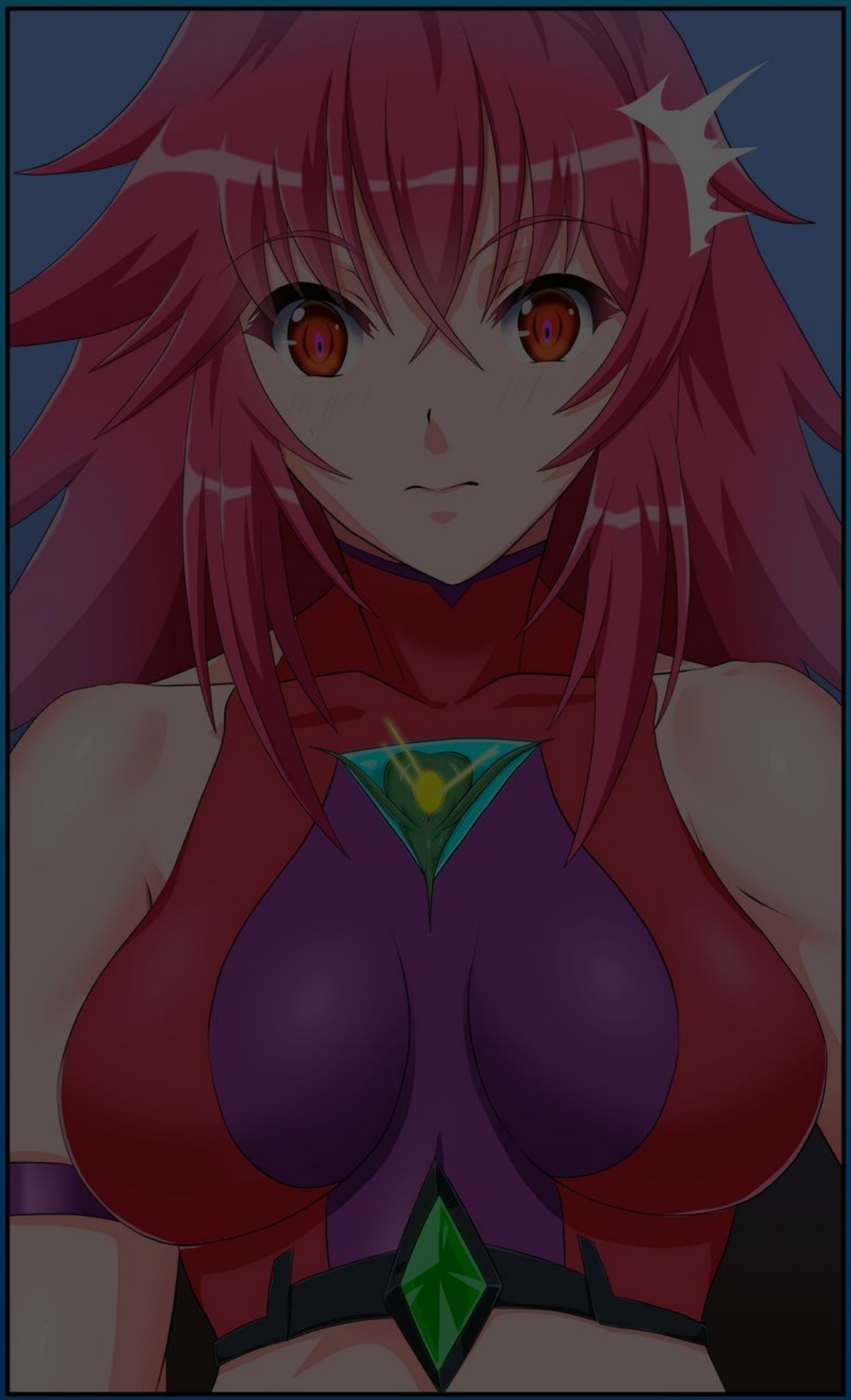
という音がどこからか聞こえた・・・・・。

「ん？。」

その音に気付いて下を向くと、
アイシャの胸にある結晶、タロスに
何かが貼りついていた。



（何？、これ、は？）



タロスに貼りついたそれは、
中心の発光部から光る針のようなものが４本生え、
その内の１本目がタロス目掛けて突き刺さる。

それは掛けられたペンダントが開いたものだったが。
アイシャが自分に起こっている事が分からない程の一瞬の事で、
思考が回り始めるが対処が遅れてしまう。

その間に2本目の針がタロスに突き刺さり、
続いて3本目が突き刺さったその時――。

「んっ！、！！！！！。」

「ヤ∩ヌ-´ヤ∩ヌ-ｏｏ〜ゎゐ∩-°」

「…はぁ…はぁ…。」
（…一体、なんでこんな…、
原因はタロスの、これっぽいけど…。）
首の拘束が緩み、アイシャは出来る限り息を整えようとし、
この状況を打開するため思考を巡らせる。
おそらく胸の三角形の結晶体、タロスに張り付くこれが
今の状況を引き起こしているのは察せられた。
ビクッ
ビクビク

全てのマーゴハンター胸に現れる結晶体、
タロス。

実際は結晶というよりは成分は骨に近いもので、
何故かマーゴハンターに成った時に生まれるのだが
その原因は分かっていない。
時折大きなエネルギーの放出の際に
光る事があるが、それによって得られる恩恵は無い。

ただ、場所的に分かり安い部分にある為、
時折タロスは狙われる事がある。

アイシャも過去にマーゴに捕らわれた際に
タロスからエネルギーを吸われたりした事もあるが、
アイシャがよく見るアニメや特撮のヒーロー、ヒロインのような
大ピンチになるような事も無かったし、

攻撃されヒビが入った事もあるが、症状としては骨にヒビが入った
事と同じ扱いになり、数日で回復した。

このように基本的にタロスはがある事で強くなるわけでもでは無く、
だからと言って弱点でもないという物で、
せいぜいマーゴハンターであると証明する為の簡単な身分証明
ぐらいにしか使えないモノというのが大半の認識なのである。

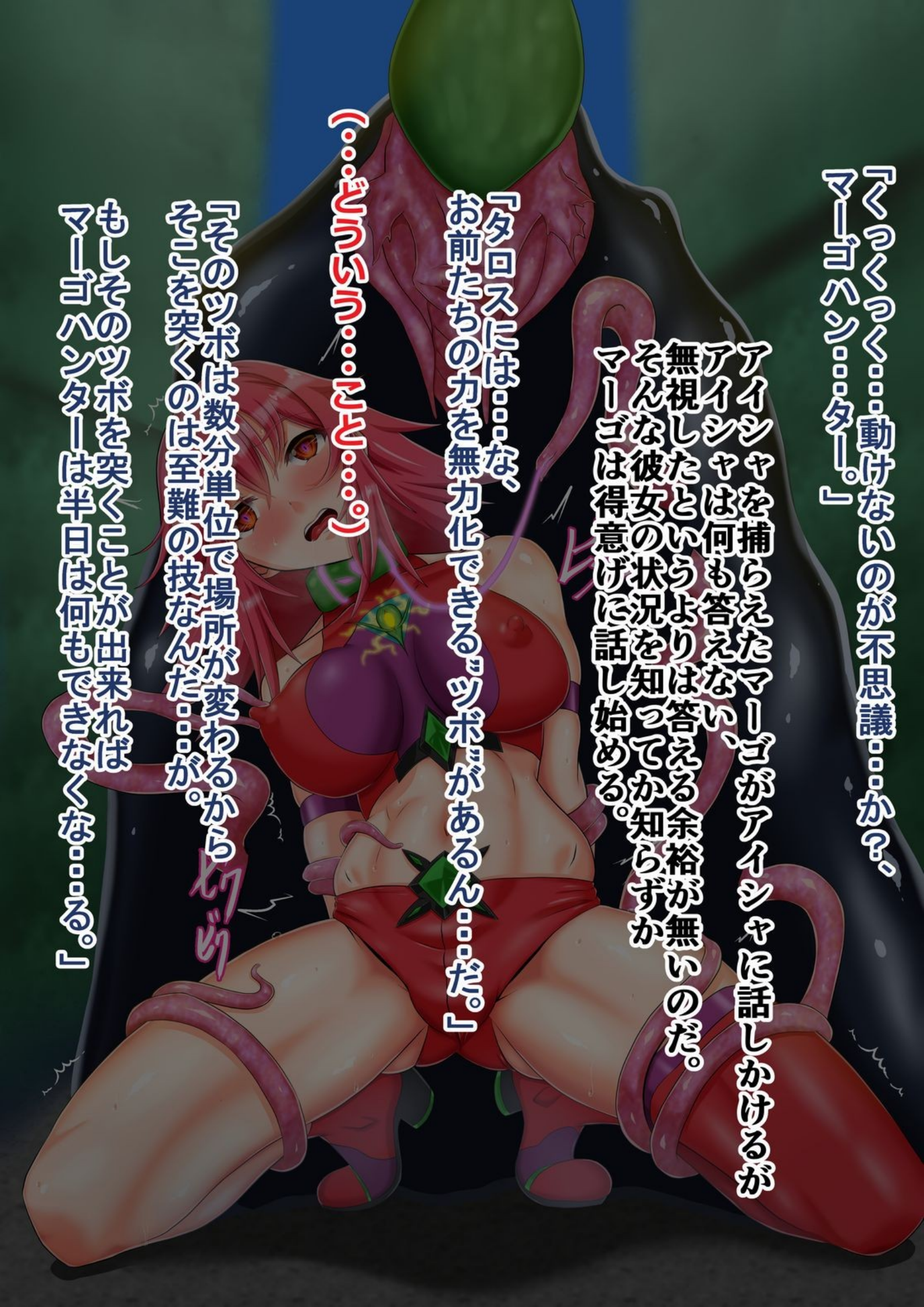
だが、そのタロスに関してはある噂があった、

それは、
タロスを攻撃された際に体の自由が利かなくなり、
力も使えない状態になった。
という噂なのだが、

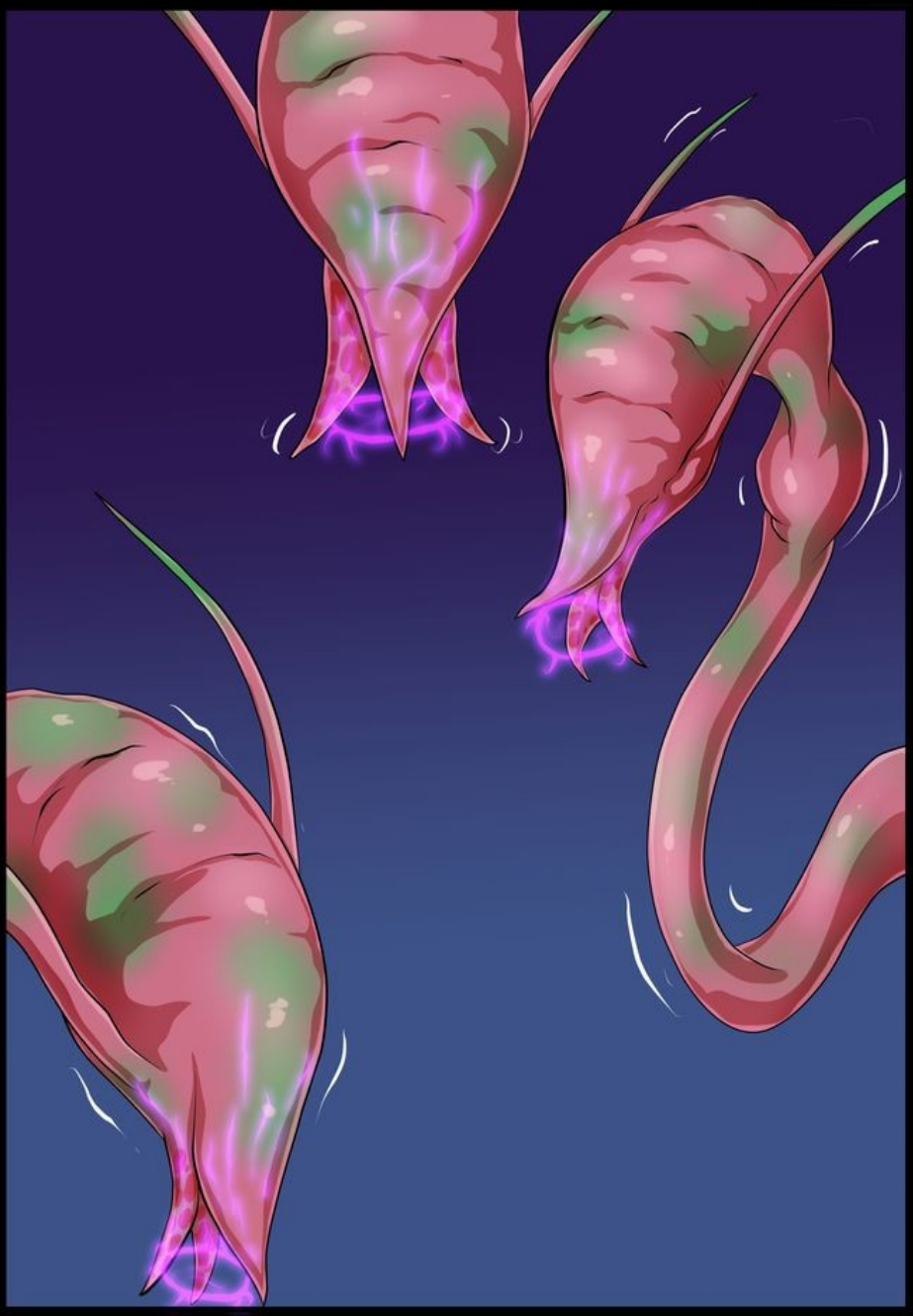
その昔あるマーゴハンターに
そのような事が起こったらしいのだが、
その原因は分からず、一晩経てば元に戻ったという。

その後原因を探る為にタロスの同じ場所
と思われる部分に衝撃を与える実験等をするも、
同じ状態になる者はおらず、
原因は
マーゴの能力によるものという結論になったという。

だが実は今でも数年に一回程度で、
タロスへの大きな衝撃で
動けなくなるマーゴハンターの話は出るのだが
今でも原因は分からない為、
噂話程度で片付けられているのだ。


「くっくっく…動けないのが不思議…か？、マーゴ ハン…ター。」
アイシャを捕らえたマーゴがアイシャに話しかけるが無視したというよりは答えない、アイシャは何も答えない。そんな彼女の状況を知ってか知らずかマーゴは得意げに話し始める。
「タロスには…な、お前たちの力を無力化できる〝ツボ〟があるん…だ。」
（…どういう…こと…？）
「そのツボは数分単位で場所が変わるからそこを突くのは至難の技なんだ…が。
もしそのツボを突くことが出来ればマーゴ ハンターは半日は何もできなくな…る。」

「だが俺が作ったそれはそのツボをある程度探す事が出来…る、
そしてツボを突くことが出来れば、
数日は動けないま…だ。
まさか3回目で成功するとは思わなかったが…な。
ビクン
ビクビク

「んあっ！♥、ふぃ…あっ♥あっ♥！。」
（な…に！？、
なんで、こんなっ…おか…し
…んあぁっ♥♥！。）
スライムがアイシャの腿に触れると、ビクンと腰が跳ねる、
スライムはアイシャの体を這い上がっているだけで、
まだ何かをしているわけではない、
だがスライムが蠢くたびに
そこの場所から凄まじい快感が発せられ、
その不意打ちの快感に堪えられず、
アイシャは甘い喘ぎの叫びをあげてしまう
「あれ？まだ何もしてないよ？。」
「ふん、感覚が狂っているから…な、当然の反応…だ。」
ビクン
グジュルン…
ガクガクッ
ズル…ズル…

「そうだ、そして乳首とクリトリスにこれをつけれ…ば、…くっくっくっく。」